

客家語と日本漢音、宋音の蟹摂字について：閩南語 文語音と浙江呉語との関わりをめぐって

羅， 濟立
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/4494555>

出版情報：比較社会文化研究. 14, pp.1-13, 2003-10-20. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：



客家語と日本漢音、宋音の蟹摂字について

—— 閩南語文語音と浙江呉語との関わりをめぐって ——

ラ サイ リツ
羅 濟 立

1. はじめに

拙稿（羅濟立2003）に引き続き、本稿では、蟹摂字における客家語と日本漢音、宋音の音韻的關係の比較対照を試みたい。即ち、蟹摂における客家語と漢音、宋音の音韻上の類似点と相違点を見究め、そこで示されている意義を明らかにしたい。方法論及び発音データの依拠は前稿に基づいている。なお、前稿と同様、漢音との關係を考察する場合、漢音と源流（唐代長安音）を同じくする閩南語文語音

との比較対照も行うこととする。そして宋音との關係を考察する場合、宋音の母胎音となった浙江呉語をも参照にすることとする。客家語ないし漢音、宋音の音韻実態や音韻変化の様相が一層把握できると考えるからである。

蟹摂は四つの等、または開口・合口両方に等しく韻母ないし重韻が存在する複雑な韻攝である。咍・皆・佳・齊・灰韻など平・上・去声揃の五つの韻と、泰・夬・祭・廢韻など四つの去声韻を含む。周法高（1984）推定音価で表1のようである。

表1 切韻音系の蟹摂

	一等	二等	三等	四等
開口	咍 <i>əi</i> 、泰 <i>ai</i>	皆 <i>ɔi</i> 、佳 <i>æi</i> 、夬 <i>ai</i>	祭 <i>iaei</i> ・ <i>iai</i> 、廢 <i>iai</i>	齊 <i>iei</i>
合口	灰 <i>uəi</i> 、泰 <i>uai</i>	皆 <i>uɔi</i> 、佳 <i>uæi</i> 、夬 <i>uai</i>	祭 <i>iuæi</i> ・ <i>iuai</i> 、廢 <i>iuai</i>	齊 <i>iuiei</i>

（注：皆韻の主母音を *ɛ* から *ɔ* に変更させて頂く。「切韻」時代に四等韻はまだ介音が生じていなかったため、韻頭の *i* は介音ではなく、母音である（李榮1952、邵榮芬1982）。また、上声、去声韻はそれぞれに対応する平声韻のもとにおさめる。）

現在、各語において蟹摂字がどのように現れているかを、順次見ていく。

2. 客家語、閩南語文語音と日本漢音における蟹摂の実態

2.1 客家語、閩南語文語音の蟹摂

2.1.1 開口韻

表2 梅県音と厦門音の蟹摂開口一等

梅県	-ɔi	臺 <i>t'ɔi</i> ¹¹ 、来 <i>lɔi</i> ¹¹ 、財 <i>t'ɔi</i> ¹¹ 、開 <i>k'ɔi</i> ⁴⁴ 、哀 <i>ɔi</i> ⁴⁴ 、改 <i>kɔi</i> ³¹ 、海 <i>hɔi</i> ³¹ 、害 <i>hɔi</i> ⁵² 、蓋 <i>kɔi</i> ⁵²
	-ai	災 <i>tsai</i> ⁴⁴ 、乃 <i>nai</i> ⁴⁴ 、採 <i>ts'ai</i> ³¹ 、戴 <i>tai</i> ⁵² 、再 <i>tsai</i> ⁵² 、太 <i>t'ai</i> ⁵² 、頼 <i>lai</i> ⁵² 、蔡 <i>ts'ai</i> ⁴⁴
	-ui	貝 <i>pi</i> ⁵² 、沛 <i>p'i</i> ⁵²
厦門	-ai	臺 <i>tai</i> ²⁴ 、来 <i>lai</i> ²⁴ 、財 <i>tsai</i> ²⁴ 、開 <i>k'ai</i> ⁴⁴ 、採 <i>ts'ai</i> ⁵³ 、戴 <i>tai</i> ⁵² 、再 <i>tsai</i> ⁵² 、太 <i>t'ai</i> ²¹ 、頼 <i>lai</i> ²² 、沛 <i>p'ai</i> ²¹
	-ue	貝 <i>pue</i> ²¹

表2によって明らかなように、開口一等の咍・泰韻において、客家語では唇音 [-ui] を除き [-ɔi]、[-ai] の二種類が現れ、閩南語文語音では「貝」字以外 [-ai] で統一されている。重唇音は介音 *u* と共起しないため、実際に [-i] を [-ui] と同音に認定しても差し支えないと思われる。閩

南語文語音に比べ、客家語の [-ɔi] は特殊なものである。その大多数は咍韻開口字に集中しているが、咍韻の合口字や他の韻（「梯」（齊韻）、「害蓋丐」（泰韻）、「脆稅吠」（祭韻））にも若干見られる。閩南語文語音の「貝」字は合口音読みに合流した。

表 3 梅県音と厦門音の蟹摂開口二等

梅県	-ai	排p'ai ¹¹ 、斎tsai ⁴⁴ 、拜pai ⁵² 、崖ŋai ¹¹ 、買mai ⁴⁴ 、敗p'ai ⁵² 、矮ai ³¹ 、邁mai ⁵² 、蟹hai ³¹
	-iai	皆kiai ⁴⁴ 、界kiai ⁵² 、戒kiai ⁵² 、芥kiai ⁵² 、解kiai ³¹
	-a	釵ts'a ⁴⁴ 、佳ka ⁴⁴ 、差ts'a ⁴⁴ 、罷pa ⁵²
厦門	-ai	排p'ai ²⁴ 、斎tsai ⁴⁴ 、釵ts'ai ⁴⁴ 、解kai ⁵³ 、矮ai ⁵³ 、邁mai ³² 、蟹hai ³² 、界kai ²² 、戒kai ²²
	-a	佳ka ⁴⁴ 、罷pa ³²

表3を見ると、開口二等の皆・佳・夬韻において、客家語、閩南語文語音ともに[-ai]、[-a]を主としている。[-a]韻は佳・夬韻しか現れない。なお、開口二等字の介音iは、中古以降、牙喉音二等字における口蓋化の生起という音韻現象を裏づけるものと思われる。梅県客家語におけるこの三重母音は東南方言において目立っているが、北方方言においても-iaiが相当普遍的に分布している。張啓煥他（1993）の『河南方言研究』によると、河南省中、59縣市（点）で二等牙喉音の字にはiaiという三重母音を持っていると見える。また、黄笑山（1995：163-64）は朝鮮漢字音、越南漢字音と朱熹反切によって考察し、開口牙喉音二等字が介音iを持つのは、元代ではなく、早くも唐・五代のある時期に始まったと指摘している。客家語は黄氏の説を裏付けている。即ちそれは唐末以降、司豫移民の南遷によってもたらされた中原地方の語音と考えられている（張光宇1996：250）。

閩南語文語音において蟹摂の一・二等が合流し、[-ai]と読んでいる。これに対して、客家語では一等字の一部は二等と合流する一方、一部は二等と区別している。後述のよ

うに、この点は漢語史上重大な意義を持つところである。

開口三等において（表4参照）、客家語の[-i]は章組声母の影響を受けたものである。その中、口語音では「世勢」などを[-e]と読むように、止摂開口字（例、事是痴絲：-i文、-e口）ないし四等開口字の一部と合流したものもある。宋代以降、蟹摂三・四等字の大部分が止摂と合流したことは周知の通りである。[-i]韻は止摂字の一部の音韻変化に深い関係があるものである¹。即ち、客家語で止摂字は基本的に、唇牙喉音の[-i]と舌歯音の[-i]とが分岐されている。舌歯音の中で、下位方言の大多数では知・章組は[-i]と読むのに対し、精・莊組字は概ね[-oi]、[-i]、[-i]と三つの音層が見える。その中、[-oi]（例、吹炊衰睡）はより早い音層で、[-i]が次いで、精・莊組と知・章組字が合流して、初めて韻母が次第に[-i]と変って、時代的には元代以降と推定されている。つまり、少数地方や少数字に見られる[-i]と[-oi]は、[-i]よりやや古い発音を伝えたものと考えられる。声母の要素を排除すれば、客家語と閩南語文語音は[i]：[e]と、整然と対応している。

表 4 梅県音と厦門音の蟹摂開口三等

梅県	-i	弊pi ⁵² 、際tsi ⁵² 、祭tsi ⁵² 、例li ⁵² 、藝ŋi ⁵²
	-i	制tsi ⁵² 、世si ⁵² 、勢si ⁵² 、逝si ⁵² 、誓si ⁵²
厦門	-e	弊pe ^{22・21} 、際tse ²¹ 、祭tse ²¹ 、例le ²² 、藝ge ²² 、世se ²¹ 、滯te ²² 、逝se ²¹ 、制tse ²¹

開口四等において（表5参照）、客家語において[-ai]、[-e]、[-i]と三つの音層が見える。[-ai]、[-e]の大多数は口語音に現れ、[-e]は[-ai]から融合して生じた単母音と考えられる。閩南語文語音は主に[-e]を以て対応している。注意すべきは、客家語の四等韻において[-e]、[-i]

が閩南語文語音と近似する一方、より大切なのは、二等韻と同じ音韻形態をもつ[-ai]というものである。開口四等韻を細音（齊齒・撮口韻）でなく、洪音（開口・合口韻）と読むことについては、3.4で齊韻の性質を考える際に検討してみたい。

表 5 梅県音と厦門音の蟹摂開口四等

梅県	-ai	溪hai ⁴⁴ 、啼ŋt'ai ¹¹ 、底ŋt'ai ³¹ 、弟ŋt'ai ⁴⁴ 、泥nai ¹¹ 、黎lai ¹¹ 、犁lai ¹¹
	-e	洗se ³¹ 、細se ⁵² 、鷄ke ⁴⁴ 、齊ŋts'e ¹¹ 、婿se ⁵² 、契k'e ⁵²
	-i	迷mi ¹¹ 、提ti ¹¹ 、西si ⁴⁴ 、齊ŋts'i ¹¹ 、禮li ⁴⁴ 、閉pi ⁵² 、濟tsi ⁵² 、計ki ⁵² 、係hi ⁵²
厦門	-e	迷bē ¹¹ 、提t'e ²⁴ 、妻ts'e ⁴⁴ 、西se ⁴⁴ 、鷄ke ⁴⁴ 、禮le ⁵³ 、濟tse ⁵³ 、計ke ⁵² 、係he ²² 、泥lē ²⁴
	-i	底ŋti ⁵³ 、泥li ²⁴

1 蟹摂は止・遇摂と関連があるのは、蟹摂の四等齊韻が上古音の魚・支・脂部から由来することと最も緊密な関係をもつと考えられる。この種の関係は客家語だけではなく、漢語の他の方言にも多数見られることは、注意すべき事実である。

以下に蟹摂開口韻における客家語と閩南語文語音の対応関係をまとめたものを、表6のように示す。

表6 蟹摂開口韻における客家語、閩南語文語音の対応関係

	一等		二等			三等		四等
	非幫系	幫系	非見系	見系	佳・夬韻の一部	非章組	章組	
梅県	-oi, -ai	-ui	-ai	-iai	-a	-i	-i	-ai・-ε (口語)、-i
厦門	-ai		-ai		-a	-e		-e

2.1.2 合口韻

表7 梅県音と厦門音の蟹摂合口一等

梅県	-oi	背pɔi ⁵² 、枚mɔi ¹¹ 、外ŋɔi ⁵² 、會會不會vɔi ⁵² 、梅mɔi ¹¹ 、堆toi ⁴⁴ 、灰foi ³¹ 、賠p'ɔi ¹¹
	-ui	杯pi ⁴⁴ 、對tui ⁵² 、雷lui ¹¹ 、罪ts'ui ⁵² 、魁k'ui ^{44・11} 、回fi ¹¹ 、悔fi ⁵² 、最tsui ⁵² 、會會議fi ⁵²
厦門	-ui	每bui ⁵³ 、堆tui ⁴⁴ 、對tui ²² 、推t'ui ⁴⁴ 、腿t'ui ⁵³ 、隊tui ³² 、雷lui ²⁴ 、催ts'ui ⁴⁴
	-ue	杯pue ⁴⁴ 、回hue ²⁴ 、悔hue ⁵³ 、背pue ³² 、灰hue ⁴⁴ 、外gue ³² 、退t'ue ²² 、罪tsue ³²

客家語の合口一等韻において、[-oi] が開口一等韻と重なったものである。その他に、[-ui] と [-i] が見える。曉・匣母の場合、「hu→f-」という音韻規則のもとで、[hui] と [fi] を同音にしてよいと思われる。また、唇音の場合 [-ui] と [-i] が同音になるのは贅言を待たないところである (ui > i / f-)。換言すれば、曉・匣母と唇音はいずれも合口の要素が音値内に含まれているのである。

ところで、一般に蟹摂一等は開口の咍韻と合口の灰韻に二分されている。しかし果摂の歌・戈韻の分合状態と類似し、客家語の咍・灰韻が同一音価で現れているのは、注意すべき事実である。そもそも合口一等韻の [-oi] が一つの開口韻か合口韻として存在しており、通時的变化を経て現

在の状態に至っている可能性は大きい。「切韻」において、韻と韻の間に差別があるのは、主母音の差にあり、開・合口の区別を条件とするわけではなからう。

一方、両語において、合口一等韻の音韻形態は三・四等のそれ (表11参照) とよく近似していることに目を引く。これは合口一等韻の特色だと思う。なお、漢語語音史において [-ue] を [-ui] の変体異音と見なしてもよいものである。

合口二等において (表8参照)、声母の影響を受けた少数の字を除くとなると、両語が整然と対応している。そして [-ai] : [-uai]、[-a] : [-ua] という開・合口の対応も鮮明に現れている。

表8 梅県音と厦門音の蟹摂合口二等

	怪	懷	歪	淮	壞	畫	蛙	掛	話
梅県	kuai ⁵²	fai ¹¹	vai ⁴⁴	fai ¹¹	fai ⁵²	fa ³²	va ⁴⁴	kua ⁵²	fa ⁵²
厦門	kuai ²¹	huai ²⁴	uai ⁴⁴	huai ²⁴	huai ²²	hua ²²	ua ⁴⁴	kua ²¹	hua ²²

合口三等において (表9参照)、客家語は [-oi] と [-ui] を以て対応している。([-ue]) が現れている。閩南語文語音は [-ui] ([-ue])

表9 梅県音と厦門音の蟹摂合口三等

梅県	-oi	脆ts'ɔi ⁵² 、税soi ⁵² 、吠p'ɔi ⁵²
	-ue	穢ve ⁵²
	-ui	歳sui ⁵² 、衛vi ⁵² 、魔fi ⁵² 、銳iui ⁵²
厦門	-ue	歳sue ²¹ 、税sue ²¹ 、衛ue ²² 、銳lue ²¹ 、魔hue ²¹ 、穢ue ²¹
	-ui	吠hui ²² 、肺hui ⁵³

2 果摂の歌・戈韻は開・合口を区別せず一つの韻で現れている。これについては、拙稿(2003)を参照していただきたい。また、馮蒸(1990)は「切韻」の分韻の原則、越南漢字音などによって、咍・灰兩韻は開・合対立の韻組ではないことを指摘している。

合口四等（表10参照）は牙喉音字に限られている。客家語では〔-ui〕の一種類しかないが、閩南語文語音でも〔-ui〕〔-ue〕で対応している。注意すべきは、「携蛙惠慧」

などの如く合口四等牙喉音字の一部は介母が弱化し脱落したという点である。これは漢語語音史上重要な音韻事実であり、後述(2.2)の日本漢音、宋音にも見られるものである。

表10 梅県音と厦門音の蟹撮合口四等

梅県	-ui	圭kui ⁴⁴ 、閩kui ⁴⁴ 、桂kui ⁵² 、携hi ¹¹ 、蛙hi ¹¹ 、惠fi ⁵² 、慧fi ⁵²
厦門	-ui	桂kui ²¹ 、惠hui ²² 、慧hui ²²
	-ue	圭kue ⁴⁴ 、閩kue ⁴⁴ 、携he ²⁴ 、蛙he ²⁴

なお、合口韻における客家語と閩南語文語音の対応関係をまとめたものを表11のように示す。

表11 蟹撮合口韻における客家語、閩南語文語音の対応関係

	一等	二等	三等	四等
梅県	-oi, -ui	-uai, -ua (佳・夬韻の一部)	-oi, -ui (-ue)	-ui
厦門	-ui (-ue)	-uai, -ua (佳・夬韻の一部)	-ui (-ue)	-ui (-ue)

要するに、開口韻に比べ、合口韻において客家語と閩南語文語音の音韻形態は単純かつ一致性を窺わせている。一等と二等の語音の間に、〔u〕介音の有無の他に、音韻形態もやや分岐しているのに対して、三等と四等は殆ど同じ形態を呈している。こうしたことから、一等は二等と区別し、三等は四等と合流するという音韻特徴が見えてくる。さら

に、一等韻が三・四等韻へ近づいていく傾向にあったのは、その音韻が激しい変化を辿ってきたのではないと思われる。

以上閩南語文語音と比較対照することによって、客家語の音韻特徴を見てきた。次に、日本漢音における蟹撮の音韻実態を見ることとする。

2.2 日本漢音の蟹撮

まず、蟹撮各韻の原則的仮名表記を一覧表としておこう。

表12 蟹撮における漢音の原則表記

	一等			二等			三等		四等	
	開口	合口		開口	合口		開口	合口	開口	合口
		見系	非見系		皆夬韻	佳韻				
原則表記	-ai	-wai	-ai	-ai	-wai	-wa	-ei	-wei	-ei	-ei, -wei
字例	来ライ、 採サイ、 害カイ	外グワイ、 回クワイ、 悔クワイ	最サイ、 杯ハイ、 雷ライ	排ハイ、 界カイ、 邁マイ	懷クワイ、 壞クワイ、 噲クワイ	蛙ワ、 掛クワ、 畫クワ	弊ヘイ、 勢セイ、 裔エイ	衛エイ	梯テイ、 西セイ、 禮レイ	珪ケイ、 桂ケイ、 恵クエイ・ケイ

一等咍韻は例外なく「㊦イ」韻形で表記されている。泰韻の字は、開口字は「㊦イ」韻形で、合口字は「火イ」「クワイ」「グワイ」の形で表記されている。但し、例外として開口字「蔡サイ・セイ」の「㊦イ」形は呉音の延長であろうかと思われる。一般説では、中国の南北朝期の音韻を伝えているとされる呉音系の蟹撮の一・二等の各韻に「ア」・「エ」の二種類の主母音が現れることである³。合口字「最サイ」は齒音の影響をうけて合口性介音を落としたものであろう。

灰韻の文字はカ行のみ「-wai」で、他は「-ai」で統一表記されており、異例は存在しない。

二等皆韻の開口字は原則として「㊦イ」韻形で表記されている。「効カイ・ケイ」の「㊦イ」韻形は呉音の混入であろうかと思われる。同じ韻の合口字は「火イ」「クワイ」と表記されている。佳韻開口字は原則として「カイ」「ハイ」「バイ」と表記されている。但し「曬レイ」と「釵シャ・サア」が例外となる。「曬」は去声卦韻生母二等に属し、「サイ」の

3 古層の呉音体系である万葉仮名表記で、皆韻字の主母音は「エ」韻となっている。階ヶ乙、戒ヶ乙、俳へ乙の如くである（大野1955）。また、沼本（1982：560）によれば、咍・泰・佳・皆・夬韻字では「ア」韻が主流を成すが、「エ」韻は古音の投影、即ち切韻よりやや前の六朝の音であろうと指摘している。

はずである。「麗」からの誤読であろうか。同じ韻の合口字は牙喉音のみであり、「ワ」「クワ」「カ・カイ」で表記されている。このように、開口の「釵」を含めて、佳韻の字に「ㄨイ」韻形でなく、しばしば「イ」の音を落とすことがある。『磨光韻鏡』、『漢呉音図』のような規範性の強い音図では、これに属する文字は全部「ㄨイ」形で統一しているが、日本漢字音として通用している漢音を見ると、「ㄨ」形を呈するものが混在している。本稿で調べた資料以外に例を拾って見ると、『色葉字類抄』前田本に「佳カ」「畫クワ」、『慈恩伝古典』に「卦クワ」「畫火」と見える。『広韻』、『韻鏡』などの韻書を検索すると、当該韻字に又音として漢音「ア」韻となる果・仮攝の韻の反切が記載されている場合が多い。また、現代西北方音や唐五代西北方音諸資料を通じて、大きく言うと、一等は ai、二等は a という傾向が認められる(羅常培1933: 151-52)。それらは漢語音韻史に見られる佳韻字の ai > a という傾向を反映したものと見なしてよい。しかし、佳韻字には異なる方言に由来する二種類の発音が同時に行われていた可能性もないとは言えない。一方、夬韻字に所属する字数は比較的僅少で、「邁マイ」と「嚙クワイ」二例のみである。佳韻字と並行して、ai > a という現象は他資料にも見出される。例えば、『運歩色葉集』に「話ッ」、『和字彙』に「話クワ」などの如くである⁵。客家語、閩南語文語音と一脈相通じるものと考えられる。

三等祭韻の文字は開口・合口ともに「ヘイ」「セイ」「エイ」「エイ」の形を取っている。例外として「祭サイ」がある。『法華經音義』、『新訳華嚴經音義』などの呉音資料に「際サイ」とあり、「祭」は「際」と同じ音韻地位に属するため、「ㄨイ」形は呉音系字音と見られる⁶。これは『切韻』よりやや前の核韻母が明瞭な時代の音を反映したものであろうと考えられている(沼本1982: 561)。

三等廢韻に該当字がない。

四等齊韻の文字は、開口字は一般に「エ列仮名+イ」の形で表されている。但し「齊セイ・サイ」、「細セイ・サイ」の如く、複音注内に「ア列仮名+イ」のが見られる。これらは呉音の型に相当すると考えられる。呉音が「ㄨイ」韻形である点は『法華經音義』に「齊サイ」「細サイ」、『観智院本 類聚名義抄』に「齊禾坐イ或サイ」「細禾サイ」、『新訳華嚴經音義』に「齊サイ」「細サイ」とある。『法華經音義』に「サイ」の項目の下に「妻體濟謫米」など16字を収めているから、これらの字が呉音の混入であると考えられる⁷。しかも齒音字の

みの字に現れていることは、子音の音価の関係で、「ㄨイ」韻に近く発音されやすかったような事情があったのではないかと考えられる。勿論、四等字において客家語、閩南語文語音にも[-ai]が見出されるように、原音側の音韻事情と直接に繋がっている可能性はある。また、「洗セン」の「洗」字は上声齊韻心母四等に属し「セイ」のはずである。『広韻』を見ると、当該字に又音として漢音「エン」韻となる「銑」韻の「蘇典切」という反切が記載されている。それが日本側に影響して「セン」として固定したのであると思われる。同韻の合口四等字は牙喉音のみに限られ、原則的に「ケイ」「クエイ」で表記されている。合口字で古く一般に「クエイ」と注記されていたが、「ケイ」となるのは、唇牙喉音四等字における合口性の弱化傾向があるということに関わると考えられる。即ち、漢語原音の合口性は、牙喉音四等の場合には拗音的口蓋性によって聴覚的に圧倒されるため、三等の場合と比べれば多少聞き取りにくかったのであろうと考えられている⁸。興味深いところは、同じ現象が客家語、閩南語文語音にも見出されることである。

表12で最も明らかなことは、漢音において蟹攝の一・二等と三・四等とが截然と区別しているという点である。即ち、直音韻の場合は主母音が[a]で転写されているのに対して、拗音韻の主母音がすべて[e]で転写されている。母胎音となった漢語原音の音韻体系がだいぶ簡略化されたと考えざるを得ない。

3. 蟹攝における客家語、閩南語文語音と日本漢音の比較

3.1 一等重韻の合併と一・二等韻の合流

『切韻』において「覃：談」と「哈・灰：泰」とはいわゆる一等重韻である。それらは『慧琳音義』(783~810、黄淬伯1930参照)の反切では既に合併され統合されている。張參著『五經文字』(776、邵榮芬1964参照)の反切では、泰と哈韻、泰と灰韻を互いに反切下字とする例が見られる。それらを通じて分かるように、唐代中期に開口の哈韻と泰韻は合流し、唇音字以外は *ai となっていた。そして宋代におけるハ・泰両韻の合流は *ai > ai という変遷のように、一等韻が二等韻への接近として実現された⁹。また、哈・泰韻の少数唇音字も合流し *ai となり、その後、合口の灰韻 *uai (ui) に吸収された。これと並行して、合口におい

4 築島(1966)『興福寺本大慈恩寺三蔵法師傳古點の国語学的研究 索引篇』による。

5 他の例は岡本(1991: 243)参照。

6 小倉(1995: 690)による。また、沼本(1982: 561)は、祭韻は「エ」を主な表記とするが、「ア」表記は切韻より比較的早い時期の音としている。

7 小倉(1995: 542-45)参照。

8 詳しくは有坂(1957: 359-64)参照。

9 王力(1985: 303-04)によれば、宋代において哈韻が佳・皆韻と合併され、皆来部となったという。

でも唐代中期に灰韻が泰韻と合併し *uəi となる。しかしその後の変遷は開口の咍・泰韻と異なって、その韻母は *uəi > uai と変化せず、高母音化して *uəi > uei(ui) となって、蟹摂合口四等及び止摂合口韻母と合流するに至っ

ていた。

以上述べた内容により、客家語の蟹摂一等韻の変遷は次のように推定される。

開口韻 -oi > -ai (『切韻』の *-əi、-ai は客家語では [-oi] と想定する。)

合口韻 *-uəi、-uai > -uai > -ue > -ui (灰韻 *-uəi の一部は客家語では [-oi] と想定する)

ところで、さらに時代を遡って見ると、南北朝期の音韻実態を反映した『經典釈文』反切 (583、王力1984参照) では灰韻と咍韻は既に同一韻となったと見える。これと一致して、客家語でも灰・咍兩韻を区別していない。これらを考え合わせると、『切韻』音系の灰韻は咍韻の合口でなく、咍・灰兩韻は開・合口の対になっている関係を持たないということが推察される。兩韻はそれぞれ異なった主母音を有すると考えられる。従って、漢音の原音及び閩南語文語音での一等合口韻の介音は後期の音韻変化と認めるべきであろう。一方、一等開口の咍・泰兩韻、合口の灰・泰兩韻が合流したのは三者が共通している。しかし、漢音、閩南語文語音は開口の一・二等韻の合流変化を呈するのに対し、客家語の開口一等韻は、一部は漢音、閩南語文語音の如く二等韻に合流し、一部は一等韻内への合流変化を示している。即ち、客家語では一等の [-oi] は開・合口の区別を問わず同一韻形で現れており、二等韻の開口は [-ai]、合口は [-uai] となるのである。一等韻の主母音は奥舌中母音、二等韻は前舌低母音であり、一等は二等と区別する傾向が著しい¹⁰。先学の推定音価によれば、漢語の韻母における一・二等の区別は既に上古期に存在したとされている。中古期に、なおその区別を示しており、ただその区別は主母音の異同によって表われることが分かる。しかし、中古期以降、音韻が急速に変っていくために、各方言の変遷も分岐している。開口一・二等韻の区別は漢音と閩南語文語音には見出されない現象である¹¹。ここで、音韻の研究において、「等」というレベルより、むしろ「摂」という概念に焦点を置き、総合的に考え合わせる必要が生じてくることが示唆的である。

3.2 二等重韻の合併

皆・佳・夬韻はいわゆる二等重韻である。「切韻」ではなお区別があったが、『五經文字』や『慧琳音義』などの反切資料では一つに統合された。しかもこの合流変化は日本漢音、閩南語文語音と客家語だけでなく、広く北方方言にも見出され、北方移民が第二回 (唐末) の南遷以前に既に完了していたと考えられる。蟹摂二等重韻の合併は、「切韻」二等の皆韻 *-ɒ-・佳韻 *-æ- が低母音化して、夬韻 *-a- への合流として実現されたと推定される。但し、佳・夬韻の一部は麻韻へ流入していた。それは漢語方言の大多数にも見られる。盛唐の詩人李白 (701-62)、杜甫 (712-70)、白居易 (772-846) の詩の押韻では佳韻字が麻韻字と混用されるのが普通である。日本呉音では蟹摂二等字は主に「アイ」韻形と読むものの、「佳カ」「畫カ」「話ッ」などの「ア」韻形も見出される。この変化は早くとも南朝時代、遅くとも宋代以前に既に起っていたと考えられる¹²。しかし、佳・夬韻字を麻韻に入れたのは主に唇牙喉音字に限って、その分化に条件がついているように見える。

前述のように、夬韻は漢音では一部麻韻へ合流し、「ア」形になるものがある。しかも、漢音の母胎音では、開口字には部分的に麻韻に移ったものがあったが、合口字も殆ど麻韻化した。これは客家語、閩南語文語音と異曲同工の妙がある。中原漢語に同一の淵源あるものではあるまいかと疑われる。

3.3 開口四等齊韻

齊韻はいわゆる仮四等韻であり、上古音では洪音であった。一般に五・六・七世紀の北方方言では四等韻に既に -ai が存在したと考えられている。李栄 (1952: 107) の考察す

10 劉論、他 (1999: 287-88) によると、江西客家語の殆どは一・二等が区別されているという。また、閩西客家語では、蟹摂開口一等字は二つの読み方がある。その一つは一等合口のように読んでおり、二等と区別している。例えば、長汀で、一等の「該」を [kue³³]、二等の「街」を [tse³³] と読む (藍小玲1999: 21)。

11 しかしながら、漢音の受容において、音韻体系や音節構造が異なっているために、漢語原音における一・二等の主母音の差異を問わず、同一視されて伝わってきた可能性もある。

12 周祖謨 (1966: 606) は次のように述べている (拙訳)。「『広韻』において佳韻と皆韻はもともと同一類に属す。しかし唐代に佳韻の牙音字「佳涯崖」などが既に麻韻と押韻した。故宮所藏の王仁昫『刊謬補缺切韻』において、佳韻と麻韻が同じ音韻地位となるのが一つの証拠である。しかもその類として、洛陽人・元結宿の「丹崖翁宅」も「崖佳車」を以て押韻している。宋代において佳韻または去聲卦韻の牙音字も麻韻去聲と同音し、夬韻匣母の「話」字も現代音と同様となる。「話」を禡韻に入れたのは五代に始まったと考えられる。」また、劉曉南 (1999: 66) は『宋代閩音考』において、「佳韻系・夬韻系正處於音變之中、它們其中一部分字已大量押麻車部、實際語音已入麻車、有的可能麻・佳夬兩讀。」と述べ、麻韻と佳・夬韻の合流を示している。

るように、法顯（417）から地羅訶羅（683）までの二百六十年余りにおいて、訳者の大多数は四等字を以て梵語の *e* に対応させ、西域記（646）にも「多 *ta* + 伊 *i* = 低 *te*」という特別な注記が記載されている。梵語の「母音交替」という音韻規則のもとで、*e* と *ai* とが自由に変換することができるのである。四等字が梵語の *e*、*ai* という二種類に対応することはさらに邵榮芬（1982：126）の研究によって確定される。また、施向東（1983）は玄奘（600-64）訳音によって唐初の中原方言音を考察した。そこで、齊韻字の大部分は *e* に対応し、*ai*、*i* に対応するものも少々ある。これにより、西晋末年以前に、齊韻は既に三種類の韻母があったということが推察される。その中で、*-ai* は一番古い形で、*-e* は南北朝を通じて唐初にかけて最も普遍的な形で、*-i* はやや後期のものと考えられる。日本呉音の反映はこのことを裏付けるものである。張光宇（1994：138）によれば、齊韻字は呉音で *[-ai]* と *[-ei]*、漢音では *[-ei]* の音形が具現されている点、または呉方言、閩方言にも *[-ai]* 韻が見出される点などから、齊韻字の *ai* は中古期の呉語の特徴であると指摘している。その上、「切韻」四等の反切上

字が一等字を用いるため、「切韻」時代の四等字は洪音とされるのがほぼ確実である。一等韻との区別は主母音の違いにあるに違いない。「切韻」時代以降、四等韻の主母音 **e* は *i* 介音と結び付きやすくなるため、洪音から細音に変わっていったと考えざるを得ない。馮蒸（1995：56）は宋代初期の中原漢語を反映した『爾雅音注』を考察し、齊韻は *i* 介音を生じて、祭韻のみでなく、音価が相近い止摂三等韻と合流すること、齊韻が三等韻への合流が五代末・宋初に既に完了していたことを指摘しているが、相当説明量があるものと考えられる。

中古音の四等韻に存在するこの差異は、現在、漢語各方言の異なった音韻変化によって分岐されている。「切韻」の体系を主母音によって分類すると、齊韻と同類のものは蕭韻（效摂）、添・帖韻（咸摂）、先・屑韻（山摂）、青・錫韻（梗摂）が挙げられる。その中で、客家語において洪音の読み方をよく保存しているのは齊韻である。他の韻はただ少数の地方や文字で洪音が見られるのに対して、表13によって明らかなように、一字両読を含んだとしても、洪音読みの齊韻字は量的には少なくないと見える。

表13 四等齊韻字の発音

		批	啼	梯	底	低	弟	泥	黎	犁	齊	系
梅県	口語音	p'ai ⁴⁴	t'ai ¹¹	t'oi ⁴⁴	tai ³¹	tai ³¹	t'ai ⁴⁴	nai ¹¹	lai ¹¹	lai ¹¹	ts'ɛ ¹¹	hɛ ⁵²
	文語音	p'i ⁴⁴	t'i ¹¹	t'i ⁴⁴			t'i ⁵²				ts'i ¹¹	
厦門	口語音	p'ue ⁴⁴	t'i ²⁴	t'ui ⁴⁴	tue・ti ⁵³	te ⁵³	ti ²²	li ²⁴	le ²⁴	lue ²⁴	tsue ²⁴	he ²²
	文語音	p'e ⁴⁴	t'e ²⁴	t'e ⁴⁴			te ²²	lē ²⁴		le ²⁴	tse ²⁴	

客家語だけではなく、実際に閩南語口語音では、*[-ui]* (*[-ue]*) の他に、齊韻字を *[-ai]* と読むものも少なからず存在 [*ts'ai²²*]、西 [*sai⁵⁵*]、犀 [*sai⁵⁵*]、尿 [*sai⁵³*]、婿 [*sai²¹*]、臍 [*tsai²⁴*]、體 [*t'ai²²*] (*[t'ue²²]*) の如くである。こうしたことから考えれば、両語では齊韻の起点を *-ai* と見なしてよからう。そして、閩南語口語音では高母音化及び奥舌音化して、*-ai* > *-oi* > *-ue*、*-ui* という変化が起っていたと推定される。これと並行して、客家語の「梯」*[-oi]* も高母音・奥舌音化によって生じたものである可能性は高い。従って、*[-ai]* は閩南語文語音の *[-ai]* より、一層早い時期の語音の残留と考えられる。

客家語、閩南語ともに西晋の中原地方に源流をもつという（羅香林1933、張光宇1995）。両方言ともに蟹摂四等に

存在している。例えば、

[-ai] 韻母が見出される所以であろう。閩南語と対照することによって、客家語の *[-ai]*、*[-ɛ]*、*[-i]* 三つの音層がさらに鮮明に現れてくる。実は梅県だけではなく、閩西客家語（長汀、連城、寧化、清流、上杭、永定、武平など）の口語音でも齊韻を洪音と読むものが相当豊富に保存されている¹³。現在、客家語の齊韻は *-ai* > *-ɛ* > *-i* といった変遷過程を辿って、異なった語音層が積み重なっているものと認められる。

以上の考察により、齊韻において北方漢語の変遷は次のように推定される。

中原東部 *-ai* > *-oi* > *-ue*、*-ui* → 閩南語口語音

中原西部 第一期 *-ai*
 第二期 *-e*
 第三期 *-i*

→ 客家語口語音、呉音
→ 客家語口語音、閩南語文語音、呉音、漢音
→ 客家語主要層、鎌倉宋音

13 羅美珍・鄧曉華（1995：41）参照。

つまり、-ai 韻母は最も早い時期の北方方言の反映である。閩南語文語音の [-e] と漢音の [-ei] 形は梵語の e と整然に対応しており、それは五・六・七世紀、梵漢対音に反映されている北方方言の音韻現象と符合している。中古時代以来、北方方言は次第に高母音化しており、現代呉語ではさらにその傾向を一層示しており、舌尖母音 -i を示したものもある。(4.1参照)。

客家は北方から攻めてくる異民族に追われて南下した漢民族の王朝高官達の末裔としての誇りを持ち、客家語は古い時代の正統的な漢民族の言葉であるとの自信を持っている。齊韻の音韻変遷から見れば、客家語はまさに中古時期中原の共通語の語音変遷の規律に沿って動く様相を呈している。なお、客家語、閩南語と日本漢音ともに中原漢語に淵源があり、四等韻にはなお洪音を残存させているのである。

3.4 三・四等韻の分合及び止摂韻との区別

鮑明燾 (1987) の「初唐詩文的韻系」によれば、蟹摂は一等韻、二等韻、三・四等韻という三つのカテゴリにまとめられると指摘している。客家語はその状態とよく合致している。ただ客家語で三等の祭・廢韻は細音と読むのに対し、四等齊韻の多くは口語音では洪音と読み、一層早期の音韻状態をも反映している。そこには三・四等韻の区別現象が見られる。

ところで、『經典釈文』反切 (王力1984: 43) では、佳韻と果摂の麻韻が相通じる例が見られる他に、齊韻と止摂の之・支韻が相通じる例も少数見出される。この現象は客家語、閩南語文語音ともに存在している。齊韻は止摂字と押韻させるために、前提条件として、その高舌音化が急速に

進まなければならないと考えざるを得ない。このことから、隋末唐初の際、蟹摂三・四等字の一部が合流し、その主母音が止摂へ近づいていったことが見えてくる。また、このような蟹摂三・四等韻の合流変化は『經典釈文』以前に既に始まったのではないかと推察される。しかも、日本呉音では齊韻が主に「㊦イ」、「㊧イ」韻形とし、変って漢音では三・四等がすべて [-e] にまとまるのは、その母胎音となった漢語原音の主母音が前舌母音の半狭音か半広音かであり、三・四等韻が合流の傾向にあったと考えられる¹⁴。なお、唐代において祭・廢韻が霽韻 (齊韻の去声) と混同するのは、玄應音 (周法高1948) によっても証明される。しかし、注意すべきは、これらはあくまでも局部的現象であり、全般的に蟹摂の三・四等韻はまだ止摂の諸韻と区別するということである。齊韻は唐詩では独用し、『唐五代西北方音』では *-e- に対応し、三等韻の *-æ- と区別していることから知られるのである (羅常培1933: 165)。音韻の諸資料から考えれば、宋代に至ってから、齊韻は祭・廢韻とともに止摂に合流していたということが分かる¹⁵。これにより、蟹摂における三・四等韻の区別、または止摂との区別は宋代以前に遡りうる¹⁶。

蟹摂の三・四等韻において、客家語、閩南語文語音と漢音ともに合流の傾向にあったと見える。但し客家語では開口韻の [-ai] と合口韻の [-oi] は三・四等が合流する他の韻より、保守的性格を見せている。閩南語文語音と漢音はこれらの韻母が見出されないのである。それ以外、合流した三・四等韻には二つの音層が観察される。つまり、[-ɛ]、[-i] (漢音は [-ei]) とその合口形 [-ue]、[-ui] (漢音は [-wei]) である。客家語蟹摂四等韻の変遷は次のように推定される。

開口韻 * -iæi, -iai, -iai > -iei > -ei > -ɛ, -i

合口韻 * -iuæi, -iuai, -iuai > -uai > -uei > -ue, -ui

4. 客家語、浙江呉語と宋音における蟹摂

次に蟹摂における客家語と宋音の異同点を考察する。比較する前に、まず宋音及びその基となった浙江呉語の実態を見ることとする。

4.1 浙江呉語と宋音における蟹摂の実態

現代の浙江呉語では蟹摂が概ね止摂と合流している。銭乃榮 (1992) の「六十年来呉語語音的演変 (老派)」から、今6点を抜粋して必要な部分だけ抄録してみると、表14の通りである。(原著の声母を国際音声記号に変更している。「口」は口語音、「文」は文語音を示す。)

14 『慧琳音義』では開口・合口祭韻甲類と齊韻が合流し、合口祭韻乙類と廢韻とが合流した (河野1979)。漢音もこれらの合流を反映し、矛盾はない。

15 宋元時代には齊韻が既に止摂に合流していたということは、周祖謨 (1966: 611) に「北宋除支脂之微通用外、齊韻平上去三聲及去聲之祭韻廢韻亦均與以上四韻合用不分、與今日語音最為相近…」とあること、『四声等子』では「跽 (跽) 弟體帝」、『切韻指南』では「弟體帝」が蟹・止二摂に収められ、両書で止摂は「弟」を「地」の上声とすることから知られる。

16 馮蒸 (1995) によれば、蟹摂開口三・四等は単母音 -i となって、止摂開口三等韻と合流したのは、文献的には宋代初期から見られるという。なお、合口三・四等韻も宋代に止摂合口韻と合流した (王力1985: 292)。

表14 浙江呉語における蟹・止攝の発音

	脂支之祭		皆佳	皆佳	泰佳	皆佳		泰佳	泰哈		泰(哈)	哈	脂支	灰泰	脂支灰泰	灰泰	脂支祭	灰泰	
	ㄅ系 試	ㄆ系 茲	k, h系 街鞋	p系 敗	t系 泰	p系 敗	t系 豺	t系 泰	k系 該	h系 海	t系 胎	ㄆ系 菜	b系 悲	梅	n, 母 類	ㄆ母 推	ㄆ系 歲	最	
杭州	i		ie	E									ei		uei		yuei		
紹興	i		a (豺文: E)							ie	E								
寧波	i, k q	i	a							e			Ei (歲又 i)						
溫州	祭文 ɿ	脂支 i	a							e			æi (類又ə)				æi, y	æi	
金華	i		a			æE									ei□、æE 文				
永康	i, i	i (四i)	iA							ei (歲又ie)									

表14 (続)

	脂支之	泰	佳	佳央	皆佳央				灰泰		微脂支齊祭			
	日母	t系	k系	h系	k系	h系	k系	h系	k系	h系	k系	h系	k系	h系
	耳文	大	挂	畫話	怪	懷	怪	懷	塊	會	鬼	為	鬼	喂
杭州	(ə) ɪ	a	ua		uɛ				ɘi					
紹興	ɪ	ɔ	uɔ (跨又ɔ)		ua				uɛ				y _ɥ	uɛ
寧波	ɪ	əu	u _o		ua、ue				uɛɪ				y _ɥ	
温州	i̯、ŋ	əu	o		a				æi		y	ɘ	y	ɘ
金華	əɪ	oə	ua		ua		uæɛ		uɪ (塊uæɛ)				y _ɥ	uɪ
永康	ɜʏ、ɣ	oə	uʌ		yʌ				uəɪ				ɣ	uəɪ

表14 (続)

	微麌脂 支齊祭	脂之 齊祭	微脂支 齊之祭	脂支之	齊祭	皆佳	脂之祭			
	p系 鄙末	t系 低例	k, h系 記希	日母 耳口二口	ts系 西	k, h系 戒文諧口	日母 蕊口	ㄆ系の他 吹口水口	日母 蕊文	ㄆ系の他 吹文水文
杭州	i			(ə) ɿ	i	iɛ	y	yɕi		
紹興	i, i _j					ia	i̇		E	
寧波	i		i _z	i _z , ɲ	i _z	iɛ	ɥ		Eɪ	
温州	ɿ _j , iɿ少		ɥ, i	ɲ	ɿ _j	a	ɥ			
金華	i (齊韻□ie)			n	i (齊韻□ie)	jæE	ɥy		eɪ, uɛɪ	
永康	i (齊祭韻ia)			ɣ	iə	iA	ɣ		əɪ	

呉語区の大部分では、開口一等の哈・泰韻と二等の皆・佳・央韻とが区別されている。しかし、浙江呉語ではそれらが合流して、杭州 [-E]、紹興・寧波 [-a]、温州 [-a]、永康 [-iA]、衢州 [-ɛ] などの如く、同音になるところが多い。そこで介音 i による一連の音韻変化が経たと見られる。即ち、「切韻」の *-əi、-ai は隋唐五代に *-ai となる。¹⁷ 浙江呉語では、母音が置き換えた変化を経て、[-iA] となるものもあるが、*-ai が -ei になってさらに単母音化し

て [-ɛ]、[-E] となったり、*-ai が [-a]、[-a] となったりするものもあり、時間的に後期的変化と思われる（この解釈は前掲書13-14頁による）。開口三等の祭・廃韻と四等の齊韻とが合流し、原則として知系の場合は [-i]、他の声母の場合は [-i] となる。ただ浙江南部では [-ie] となっていて、保守性を見せている。この [-ie] は中古以来、北方方言における齊韻の -ai > -ɛ > -i といった変遷と異なっていて、置換作用及び高母音化を経て、-ai > -ia > -ie と

17 王力 (1985: 257) による。

いう変化を辿ったものと考えられている。¹⁸

合口二等韻の大多数は -ua 類となり、開口一・二等と一類になって、『中原音韻』の皆来韻に相当する。合口一等の灰・泰韻では、見系字は uei 類、幫紐・端系の大多数は開口の -E、-ei 類となる（前掲書14頁）。合口三・四等字では、合口一等とともに止摂合口三等と合流した。見系字の大多数は -uei 類、他の声母の多数は -e 類となるが、前舌音化し

た撮口韻と読むものもある。また、三・四等韻では、-ie 類は韻尾が介音 i の異化作用を受けて脱落し、止摂に合流したのは主母音が介音と韻尾に吸収された結果と考えられる。

次に宋音の仮名転写表記に移る。まず蟹摂各韻の原則的仮名表記を一覧表としておこう。

表15 蟹摂における宋音の原則表記

	一等			二等		三等		四等	
	開口	合口		開口	合口	開口	合口	開口	合口
		唇音	非唇音						
原則表記	-ai	-oi	-ui	-ai	-wai	-ei, -ii, -i	-ei, -ui	-ei, -ii, -i	-wei, -ei, -ii, -i
字 例	来ライ、 開カイ、 愛アイ	毎モイ、 輩ホイ	最スイ、 回ウイ、 退ツイ	皆カイ、 解カイ・アイ 敗ハイ	懷ワイ、 壞ワイ、 快クワイ	際セイ・シイ、 世セイ・シ、 曳エイ	歳セイ・スイ 衛エイ	迷ミ・ミイ、 妻セイ、 體テイ・チイ・チ	桂キイ、 恵エイ・エイ、 慧イ

一等咍・泰韻の文字は、開口字はすべて「ㄗイ」形で表記されている。例外として、「太^タ・^ダ・^{タイ}」の「ㄗ」形が混在している。岡本（1991：242-43）の考察するように、「太^タ・^ダ」を呈するものが他資料で文献的に確認できる例を挙げて見ると、

「太^タ」（色葉字類抄前田本）、「太^タ拳口時^シ」（運歩色葉集）、「太^タ歳^{サイ}」（文明本節用集）……

の如くである。二等佳・夬韻と並行して、一等泰韻にも時に下の「イ」を落とすことがある。また、銭乃栄（1992：100）によって、「太」字の呉方言音を検すると、全33点中、童家橋以外、32点すべて韻尾のない -ε、-a 類を示している。しかも他の一等泰韻字「頼、帶、外」などにも末尾の母音 i の脱落した形が認められる。従って、宋音では「太^タ・^ダ」の「ㄗ」韻形は早期呉語の口語音の反映であろうか。それとも「ㄗイ」形と同居していることからすると、漢音の混入であろうかと思われる。

一等泰韻合口の文字は灰韻に合流し、「ㄗイ」形で表記されている。灰韻の字は唇音のみ「ㄗイ」形となり、それ以外「ㄗイ」形で表記され、そこで呉音、漢音に含まれる a 母音から u 母音への交替が顕著に現れている。このように、蟹摂合口一等は、合口四等及び止摂合口音の「ㄗ」形と区別している。

二等皆・佳・夬韻の文字は、開口字は「ㄗイ」形で表記されている。例外として「埋^{モイ}」「齋^{セイ}」がある。恐らく声母の要素か呉語の方処性に関わるであろう。合口字は疑いなく「ワイ」形で表記されている。

三等祭韻の文字は、開口字は「ㄗイ」「ㄗイ」「ㄗ」形で表記されている。その中で、「ㄗイ」形は漢音の形を継承したものである。合口字は「ㄗイ」「ㄗイ」で表われ、「歳^{セイ}・^{スイ}」の如く、複音注内に同居していることからすると、それは中古音から近世音への過渡的変化の韻形が混在していると考えられる。

四等齊韻の文字は、開口字は原則として「ㄗイ」「ㄗイ」「ㄗ」形で表記されている。例外として「戾^レ」「替^{タイ}」「第^{テイ}・^{ダイ}」がある。「戾^レ」は例外的に韻尾が落ちている。「替^{タイ}」「第^{テイ}・^{ダイ}」において、「ㄗイ」形は従来の漢音の形をそのまま引き継いでいるもの、「ㄗイ」形はより早くは日本呉音で既に見えており、「ㄗイ」韻が混在する現象は当時南朝呉語に残っているような発音の傾向にあったのかもしれない。合口字は「金光明」の「エイ」「ㄗイ」形、「小叢」の「ㄗイ」「ㄗ」形、「諸回向」の「ㄗ」形で表記されている。前述のように、齊韻は漢語原音では *-iei > -ei > -i と変化して止摂と合流すると推定されている。宋音の仮名書音形はまさに漢語原音の通時的变化の進行過程におけるその過渡的反映かと思われる。換言すれば、「ㄗ」韻形は止摂の [-i] との合流の反映である。「ㄗイ」韻形を取るのには、-iei > -ei > -i に移る過程において、-ei の段階に最も近いと考えられるが、「ㄗイ」形はこの ε が弱まってやがて [i] として定着させたと思われる。[-ii] は i の引く音 i：という一単位ではなく、i・i という二単位である。二単位であるからこそ、止摂の [-i] と十分に区別されるのである。¹⁹ 一方、宋音は唇牙喉音四等字において、合口性

18 張賢豹（1985：35）に詳しい。

19 高松（1982：585-87）では、主資料は『聚分韻略』であるが、止摂の「ㄗ」形に対する蟹摂の「ㄗイ」形は呉語という方言差によるものか、或いは旧祭・齊韻の過渡的変化を反映したものかと推論している。

の消失過程における過渡的段階にあると見られる。合口音と開口音との仮名遣の同居する時代の資料であるゆえ、特に重要な価値を持つものである。口蓋性拗音節において、前舌の著しい隆起は、合口性の特色を聴覚的に妨害することとなるため、宋音の母胎音の唇牙喉音の三・四等字において合口性の弱まる傾向があったであろう。

このように、宋音に反映されている原音の音韻実態は母胎音とされる浙江呉語より保守的であると言える。宋音の蟹韻字の実態の解釈においては、浙江呉語より、むしろ中古音から近代音に至るその中間過程の漢語側の実態と対比してみる必要が生じてくると見るべきであろう。

4.2 蟹摂における客家語、浙江呉語と宋音の比較

4.2.1 蟹摂灰・泰合口韻と止摂合口韻の合流

『經典釈文』の反切、『切韻』音系、玄應音ないし初唐、盛唐の詩人の押韻などでは蟹・止両摂が原則的に区別されている。しかし、唐代初期の王梵志(?-670?)の詩文の押韻(張鴻魁1990)において止・蟹両摂が押韻し合う例が見出され、敦煌俗文学の中の別字異文(邵榮芬1997)でも止摂の開口字と齊韻の開口字が区別されない例が見られる。こうしたことを併せて考えれば、唐代初期において、止・蟹両摂の分合は方輿的要因に係わるに違いない。しかしながら、中・晩唐以降、柳宗元(773-819)の韻文(11例)、白居易(772-846)、姚合(775-854?)、李商隱(812-58)などの詩文では蟹摂の灰・泰合口韻が少数止摂合口韻と押韻し、その発音が漸次近づいていると考えられる²⁰。南唐の朱翱反切(王力1985)では、灰・泰合口字はしばしば互いに反切下字とし、合流した状態を反映している。そして止摂合口韻に次第に近づくため、咍・泰開口韻から離れて、

一部の灰韻字が脂微韻合口字を反切下字とした例も見られる。馮蒸(1992:547)は『爾雅音図』音注例を考察し、宋代初期中原漢語の灰韻を*-uiと推定している。但し*-uiは主母音であって、初めてその後止摂諸韻への合流が可能となると指摘している。後に、灰韻の主母音が次第に弱化したため(*uɒi > uɒi > uəi > -uei(ui)、宋代の汴洛音²²、『切韻指掌図』²³、朱熹反切(王力1985)などでは止摂の合口韻に合流した例が多く検出されるという。宋代の詩詞の押韻においても、灰・泰韻合口字の多数が支微部と相通じることが観察される(程朝暉1986:305)。ついで『中原音韻』では灰・泰韻合口字はすべて齊微部に入っている²⁴。

ところで、杭州、紹興、寧波、温州(牙喉音以外)では、「梅悲」「最歳」「推類」「塊鬼」などの字組のように、普遍的に合流の状態を呈し、体系的に蟹摂の灰・泰韻と止摂合口韻の合流現象が見られる。一方、宋音では回ウイ、内メィ、外グィ、埋モィなどのように、灰・泰韻合口字は[-ui]、[-oi](唇音)となって、漢音のa母音からu母音への交替が顕著に現れ、概ね止摂合口の脂・支・微韻[-i](唇牙喉音、合口性が弱化)、[-ui](舌齒音)と合流している。朱曉農(1989:85-86)は北宋時代蟹・止両韻轍を考察し、灰・泰合口韻の文字は、五分の三は蟹轍に、五分の二は止轍に属することを指摘している。前にも触れたが、その音韻変化が『中原音韻』時代に既に完了している。こうした二つのことを併せて考えれば、宋音に反映されている漢語原音の音韻実態は南宋・元代の中原漢語に直接に繋がっているように見えてくる。しかもこの現象は客家語にも見られる。例えば、表15のように、客家語では少数声母による影響を除くと、蟹摂の灰・泰両韻が止摂合口韻に合流していると見えている。

表15 客家語における蟹摂灰・泰合口字と止摂合口韻の合流

灰・泰合口字	-ui	杯pi ⁴⁴ 、對tui ⁵² 、雷lui ¹¹ 、罪ts'ui ⁵² 、魁k'ui ^{44,11} 、回fi ¹¹ 、悔fi ⁵² 、最tsui ⁵² 、會~ ⁵²
止摂三等合口韻	-ui	非fi ⁴⁴ 、微mi ¹¹ 、輝fi ⁴⁴ 、為vi ¹¹ 、遺vi ¹¹ 、隨sui ¹¹ 、水sui ³¹ 、累lui ⁴⁴ 、龜kui ⁴⁴ 、墜ts'ui ⁵²

宋音と客家語におけるこの音韻現象はその音層が宋元以前に形成されていたことに有力な傍証を与えることが分かる。比較を通じて知られるように、唐末以降、北方方言の影響を絶えず受けたため、蟹摂の灰泰合口韻と止摂合口韻の合流現象は、宋音、客家語と呉語において普遍かつ顕著である。そこで中古時期以来、北方漢語の勢力の強さをも

窺がわせている。

4.2.2 その他

一等泰・咍両韻の合流は『經典釈文』、玄應音などの反切資料によって確定される。宋代の『四声等子』、『切韻指掌図』、『詩集伝』でも両韻が混同される。周祖謨(1966:613)

20 蟹・止両摂が相押韻できるのは、両摂内部の諸韻がそれぞれ合流し、主母音が近接していったと考えられている。唐作藩「唐宋間止、蟹二摂の分合」(語言研究1991年第1期,63-67頁。)を参照。

21 止・蟹二摂の注音例が20ある。止摂と蟹摂の「齊祭廢灰」韻が合流したことを示している。馮蒸(1992:545-47)による。

22 周祖謨(1966:581)は『声音唱和図』に頼って北宋の音韻を考察した。止・蟹二摂の分合について、次のように述べている。「聲五四位兼括止攝支脂之微及蟹攝齊祭諸韻字。考蟹攝之細音與止攝相合實自宋始。」

23 止摂の「支脂之」韻と蟹摂の「齊祭」韻が合併され第18図に配列されており、蟹摂の灰・泰合口字と止摂の「支脂微齊祭廢」韻が合併され第19合口図に配列されている。

24 齊微部は止摂の大部分、蟹摂一等合口灰・泰韻と三四等祭・廢・齊韻字を包摂している。

の「宋代汴洛語音考」によれば、宋代詩の押韻では泰韻と哈韻、二等の卦・怪・夬諸韻とは区別しないという。宋音も宋代の語音を反映して、一等重韻の諸韻と二等重韻の諸韻がそれぞれ等内で合併されている。

また、前述のように、齊韻が祭韻への合流は五代末・宋代初期以前に完了したとされる。宋音では、開口三等祭韻及び開口・合口四等齊韻の仮名は主に「㉔イ」形と「㉔」形より構成されている。とりわけ宋音の[-i]形は -ei > -i という中間的で過渡的な段階を鮮明に反映したもの、時代的には宋代初期以前の変化と推定される。一部の「㉔イ」、「㉔イ」形は中古音の延長と認めてよからう。とりわけ「㉔イ」形は日本呉音にも多く見出され、母胎音の呉語的特徴として価値がある。浙江呉語は近代以降高母音化していく

ために、-ai が見出されないのである。一方、客家語と宋音は中古時代の早・中期の -ai を反映する他に、大部分は中古以降の新層を反映し、-i 形となる。客家語と宋音ともに近代音へ近づいていく様相を見せている。

5. まとめ

以上で見てきたように、蟹摂において客家語と日本漢音、宋音の音韻実態を概観した。また、客家語と日本漢音、宋音の間に類似点と相違点もそれぞれ若干見出された。梅県客家語の音韻特徴を一覧表にしておいて、さらに日本の漢音、宋音と照合すると、次のような異同が見えてくる。

番号	蟹摂における客家語の音韻特徴	漢音	宋音
1	二等佳・夬韻に -a 韻母がある	○	×
2	開口二等牙喉音に i 介音がある	×	×
3	開口一等の一部は二等に合流し、一部は二等と区別	×	×
4	開口三等の大部分は四等と合流	○	○
5	灰・哈韻は開・合口を区別しない	×	×
6	合口一等は三・四等へ合流	×	△ (半数以上)
7	合口一等を -ui と読む	×	○
8	合口三等は四等と合流	○	○
9	一等重韻の合併	○	○
10	二等重韻の合併	○	○
11	開口四等を -ai と読むものがある	○ (僅少)	○ (僅少)
12	三・四等は止摂と合流	×	△
13	合口四等牙喉音字の一部は弱化し脱落する	○	○

(類似度を次の符号で表わす。「○」は殆ど全部ないし全部、「△」は半数以上、「×」は殆どない乃至全くないことを示す。)

上表を踏まえて分析すると、客家語と日本の漢音、宋音の異同点は次の3グループに分類できる。

1) 客家語と日本漢音、宋音との間に類似の音韻現象が見出されるもの。これらの音韻変化は主に唐代の中原漢語まで遡りうる。客家語と日本漢音、宋音は唐代の音韻実態と繋がっていることは十分考えられるのではないかと思われる。例えば、4、8、9、10、11、13番である。

2) 1番のように、客家語は漢音のみと、また6、7、12番のように、宋音のみと類似するものが認められる。これらは、漸次的に移植された漢語音が漢音と宋音それぞれの層別の違いを明確にしたままで伝えられている日本漢字音の性格を如実に物語っている。また、客家語の形成と漢音、宋音との間にはそれぞれ時間的に重なりが見られるのみならず、移民の南下(特に唐末、南宋末年に大規模の移民)に伴ってもたらされた中原の言葉が重層的に客家語に

入っていたことが推察される。

3) 客家語の音韻特徴は日本漢音、宋音には見出されないもの。例えば、2、3、5番。現在の客家語は、長い歴史の中で古い音層と新しい音層が積み重なり、異なった時期・地域の中原音韻要素が若干入っていた。一方、漢字音の受容において、音韻体系の規範に制限されたものもあるが、時代、地域、伝承方法の違いに係わる要因も大きい。従って、日本漢字音の中には明らかに音価の時代的、方処理的差異が見られ、客家語との間に相違点があるのは決して不思議なことではないであろう。

蟹摂諸韻において、中古漢語の再構音と対比する時、漢音は整然たる反映の規則を見ることができる。客家語と宋音は、一面では中古音を伝承し定着し、一面では近代音へ近づいていった。それを比較対照することによって、各言語の音韻上の性格がよく現れていることが分かる。そこに

見られる客家語と漢音、宋音における密接な繋がりは、決して偶然の一致とは解しがたいものであり、中原漢語の音韻事情とは直接関わってくるのではないかと考えられる。

主な引用参考文献 (著者、編者名アルファベット順)

- 有坂秀世 (1957) : 『国語音韻史の研究』増補新版,三省堂,東京。
 鮑 明燁 (1987) : 「初唐代詩文的韻系」音韻学研究第二輯,88-120頁。
 — (1990) : 『唐代詩文韻部研究』江蘇古籍出版社,上海。
 陳 彭年他重修、林 尹校訂 (1976) : 『新校正切宋本広韻』黎明文化事業公司,台北。
 程 朝暉 (1986) : 「歐陽修詩詞用韻研究」中国語文1986-4, 303-309頁。
 鄧 曉華 (1991) : 「客家方言與宋代音韻」語言研究增刊,1991漢語言學國際學術研討會論文集,74-78頁。
 董 同龢 (1968) : 『漢語音韻學』文史哲出版社,台北。(1998年第15版による。)
 馮 蒸 (1990) : 「切韻「痕魂」「欣文」「哈灰」非開合對立韻說」(『隋唐五代漢語研究』,山東教育出版社,濟南,472-509頁所収。)
 — (1992) : 「『爾雅音圖』音注所反映的宋初四項韻母音變」(『宋元明漢語研究』,山東教育出版社,濟南,510-78頁所収。)
 — (1995) : 「『爾雅音圖』音注所反映的宋初三、四等韻合流」漢字文化1995年第4期,48-62頁。
 平山久雄 (1993) : 「邵雍『皇極經世』聲音唱和図」の音韻体系」東洋文化研究所紀要120,49-107頁。
 黃 淬伯 (1930) : 「慧琳一切經音義反切考」『史語所集刊』第一本第二分,中央研究院史語言研究所。
 黃 笑山 (1995) : 『切韻』和中唐五代音位系統』文津出版社,台北。
 Karlgren, B. (1915-1926) : “Etudes sur la phonologie chinoise” Uplasa & Leiden. (高本漢著,趙元任・羅常培・李方桂合訳『中国音韻学研究』商務印書館,長沙,1940による)
 小倉 肇 (1995) : 『日本吳音の研究』新典社,東京。
 河野六郎 (1979) : 「玉篇に現れたる反切の音韻的研究」(『河野六郎著作集2』,平凡社,東京, 3-154頁所収。)
 藍 小玲 (1999) : 『閩西客家方言』厦門大学出版社,厦門。
 李 榮 (1952) : 『切韻音系』中国社会科学院,北京。
 李 新魁 (1988) : 「宋代漢語韻母系統研究」語言研究第14期, 51-74頁。
 劉 論、他 (1999) : 『客贛方言比較研究』中国社会科学出版社,北京。
 劉 曉南 (1999) : 『宋代閩音考』岳麓書社,長沙。
 羅 常培 (1933) : 『唐五代西北方音』史語所單刊甲種之十二,上海。
 羅 濟立 (2003) : 「客家語と日本漢音、宋音における果・仮摂について」地域文化研究創刊号,1-22頁。
 羅 美珍・鄧 曉華 (1995) : 『客家方言』福建教育出版社,厦門。
 羅 香林 (1933) : 『客家研究導論』希山書藏,興寧。
 馬瀕和夫 (1954) : 『韻鏡校本と広韻索引』日本學術振興會刊,東京。
 沼本克明 (1982) : 「平安鎌倉時代に於ける日本漢字音に就いての研究」武蔵野書院,東京。
 — (1986) : 『日本漢字音の歴史』東京堂,東京。
 — (1997) : 『日本漢字音の歴史的研究』汲古書院,東京。
 岡本 勲 (1991) : 『日本漢字音の比較音韻史的研究』桜楓社,東京。
 奥村三雄 (1956) : 「日本漢字音の体系」訓点語と訓点資料第6輯, 11-42頁。
 大野 晋 (1955) : 『万葉集大成六・言語篇』平凡社,東京。
 佐藤 昭 (2002) : 『中国語語音史-中古音から現代音まで-』白帝社,東京。
 邵 榮芬 (1964) : 「『五經文字』的直音和反切」中国語文1964年第

- 3期,214-230頁。
 — (1982) : 『切韻研究』中国社会科学出版社,北京。
 — (1997) : 『邵榮芬音韻學論集』首都師範大学出版社,北京。
 施 向東 (1983) : 「玄奘訳著中的梵漢對音和唐初中原方音」語言研究1983年第1期,27-48頁。
 高松政雄 (1982) : 『日本漢字音の研究』風間書房,東京。
 — (1993) : 『日本漢字音論考』風間書房,東京。
 築島 裕 (1966) : 『興福寺本大慈恩寺三藏法師傳古點の国語学的研究 索引篇』東京大学出版会,東京。
 王 力 (1980) : 『漢語史稿』中華書局,北京。
 — (1984) : 「『經典釋文』反切考」音韻学研究第一輯1984年, 北京中華書局,23-77頁。
 — (1985) : 『漢語語音史』中国社会科学出版社,北京。
 湯沢質幸 (1987) : 『唐音の研究』勉誠社,東京。
 張 鴻魁 (1990) : 「王梵志詩用韻研究」(『隋唐五代漢語研究』山東教育出版社,濟南,510-553頁所収。)
 張 光宇 (1994) : 「吳語在歷史上的拡散運動」中国語文1994年第6期,409-18頁。
 張 啓煥他 (1993) : 『河南方言研究』河南大学出版社,開封。
 張 賢豹 (1985) : 「『切韻』四等韻的主要元音及相關問題」語言研究1985年第二期,26-37頁。
 周 祖謨 (1966) : 「宋代汴洛語音考」(『問學集 下冊』中華書局, 1966,581-655頁所収。)
 周 法高 (1948) : 「玄應反切考」『史語所集刊』中央研究院歷史語言研究所。
 — (1968) : 「論切韻音」香港中文大學中國文化研究所學報 1,89-111頁。
 — (1984) : 『中国音韻學論文集』香港中文大學。
 朱 曉農 (1989) : 『北宋中原韻轍考』語文出版社,北京。